

令和7年度病虫害発生予報第1号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
麦類	赤かび病 アブラムシ類	並 並
モモ	せん孔細菌病 うどんこ病 ナシヒメシンクイ	やや少 やや少 やや多
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	並 並
果樹の共通害虫	クワゴマダラヒトリ ハマキムシ類 カメムシ類	並 並 並
ブロッコリー	花蕾腐敗病 べと病 アブラムシ類	やや少 やや少 並
レタス	灰色かび病 菌核病 べと病 アブラムシ類	少 少 少 並
タマネギ	べと病 腐敗病 ネギアザミウマ	やや少 やや少 並
ニンニク	春腐病 さび病 ネギアザミウマ	やや少 やや少 やや多
イチゴ（施設本圃）	うどんこ病 灰色かび病 アブラムシ類 コナジラミ類 ハダニ類 アザミウマ類	並 並 やや多 やや多 やや多 やや多
野菜、花きの 共通害虫	コナガ	やや少

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和 7 年度 病虫害発生予報 第 1 号 (4 月)

A. 麦類の病虫害

1. 赤かび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 令和 7 年産のはだか麦、小麦の開花時期は平年に比べ 3 日程度遅いと予想される。(+)
(2) 4 月の気象は、気温は平年並か高く (+)、降水量は平年並か少ない (-) 予報である。

対 策 (1) 防除適期である開花始め頃の防除を実施するとともに、開花～乳熟期に気温が高くて天候不順が続く場合は、追加防除を徹底する。
(2) 病虫害防除所ホームページ(<https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>)で、播種期別の開花期予想や防除に関する情報を 10 日程度の間隔で提供しているので、適期に防除を実施する。
(3) 圃場が過湿にならないように排水を徹底する。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 3 月中旬のはだか麦での発生は認められず (-)、小麦での発生量は平年並 (±) であった。
(2) 4 月の気象は、気温は平年並か高く (+)、降水量は平年並か少ない (+) の予報である。

対 策 (1) 1 穂当たり 7～11 頭 (寄生穂率に換算すると 60～80%) 寄生している圃場では、早急に防除を実施する。
(2) アブラムシ類の防除により、害虫全般の発生を少なくする。

B. 果樹の病虫害

一モ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量はやや少なかった。(-)
(2) 4 月の気象は、降水量が平年並か少ない予報である。(-)

対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。
(2) 発病後の防除は効果が劣るので、4 月下旬から予防的に薬剤散布する。
(3) 病原菌は自然開口部 (気孔、水孔等) や傷口から風雨とともに侵入するので、風当たりの強い園では防風ネット等の防風対策を行う。

2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 一般圃場での前年の発生は平年と同様に認められなかった。(±)

対 策 開花期～幼果期に 2 回程度薬剤散布する。

3. ナシヒメシンクイ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける前年9月の誘殺数は多かった。
(+)

(2) 県予察圃場のフェロモントラップにおける4月第1半旬の誘殺数は少なかった。(－)

(3) 一般圃場での前年秋期の発生量は多かった。(＋)

(4) 4月の気象は、気温がほぼ平年並か高い予報である。(＋)

対 策 4月中旬～6月下旬に、他の害虫との同時防除も兼ねて10日おきに薬剤を散布する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

(2) 4月の気象は、気温がほぼ平年並か高い(＋)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 展葉期から定期的に薬剤を散布する。

2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

対 策 越冬虫が越冬場所から新梢に移動する展葉期頃から定期的に薬剤を散布する。

－果樹の共通害虫－

1. クワゴマダラヒトリ

予 想 発生地域： 山林隣接園

対象作物： カンキツ、モモ、カキ、ブドウ、ナシ、ウメ、ビワ、
キウイフルーツ等

発生量： 並

根 拠 (1) 前年の県予察圃場での予察灯における誘殺数は平年並であった。(±)

(2) 前年秋期の産卵植物（アカメガシワ）での巣網の発生はやや少なかった。
(－)

(3) 春期の産卵植物（アカメガシワ）周辺の雑草における越冬幼虫の発生は平年並であった。(±)

対 策 (1) 果樹園周辺部、特に雑木林外縁部での越冬幼虫の発生状況に注意する。

(2) 果樹園内を主体に下草の除草を行い、園内に侵入させないようにする。

(3) 幼虫の発育が進むと効果が劣るので、果樹園での発生を認めたら直ちに薬剤を散布する。

2. ハマキムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける前年10月の誘殺数はやや多かった。(＋)

(2) 県予察圃場のフェロモントラップにおける4月第1半旬の誘殺数は少なか

った。(一)

対 策 幼虫発生時期(4月中下旬)から定期的に薬剤を散布する。

3. カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 前年秋期の県予察圃場予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
(2) 前年秋期の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 県内6か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、越冬虫は確認されなかった(一)

対 策 (1) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(3) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
(4) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(5) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
(6) 防除薬剤は、主要農作物病害虫雑草防除指針、香川県監修の果樹病害虫防除暦を参考にする。

C. 野菜、花きの病害虫

ーブロッコリーー

1. 花蕾腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施する。

2. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(4) 発病株は放置せずに抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 3月下旬の発生量はやや少なかった。(一)

- (2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、平年並であった。(±)
- (3) 4月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量が平年並か少ない(+) 予報である。
- 対 策 (1) 定植時には灌注処理や粒剤を施用するとともに、発生増加を認めたら早急に防除する。
- (2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 今後作付を行う場合は、防虫ネットを張るなどして、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。
- (4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

ー レ タ ス ー

1. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量 ： 少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりともに認められなかった。
(一)

(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)

- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。
- (4) 苗床からの持ち込みも多いので、苗床での薬剤防除を実施する。
- (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量 ： 少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりともに認められなかった。
(一)

(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)

- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (3) 発生の多い圃場では夏季に水田化する。

3. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量 ： 少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりともに平年と同様に認められなかった。(±)

(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)

- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
- (2) 発生前から薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏に十分付着するよう散布する。
- (3) 結球期に発生すると、結球葉まで病気が進展しやすいので、発生を認めた

ら直ちに防除する。

- (4) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

4. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりともに平年と同様に認められなかった。(±)

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、平年並であった。(±)

(3) 4月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量が平年並か少ない(+) 予報である。

対 策 (1) 定植時には灌注処理や粒剤を施用するとともに、発生増加を認めたら早急に防除する。

(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 今後作付を行う場合は、防虫ネットを張るなどして、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。

(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

ータマネギー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 3月下旬の発生は早生タマネギ、中晩生タマネギともに認められなかった。(－)

(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。

(2) 越年罹病株は見つけ次第抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(3) メタラキシル、マンゼブまたはフルアジナムを含む薬剤、ベンチアバリカルブ等のCAA系薬剤をローテーションで散布する。

(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(5) タマネギと同一の病原菌によって発生するネギのべと病にも注意する。

2. 腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は早生タマネギで平年並(±)、中晩生タマネギで認められなかった(－)。

(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。

(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。

(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜き取り、適正に処分する。

(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。

(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。

(6) 同一の病原菌によって発生するニンニクの春腐病にも注意する。

3. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は早生タマネギで平年並（±）、中晩生タマネギでやや少なかった（－）。
(2) 県予察ほ場での3月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(3) 4月の気象は、気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か少ない（＋）予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーニンニクー

1. 春腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は認められなかった。（－）
(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。（－）

- 対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。
(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。
(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜取り、適正に処分する。
(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。
(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。
(6) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギの腐敗病にも注意する。

2. さび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。（－）

- 対 策 (1) 発生圃場では薬剤を散布する。
(2) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギ、ニラのさび病にも注意する。

3. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は多かった。（＋）
(2) タマネギの県予察ほ場での3月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(3) 4月の気象は、気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か少ない（＋）予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。

- (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーイチゴ（施設本圃）ー

1. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 3月下旬の発生量は平年並であった。（±）

- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぎ、発病を認めたら、発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 3月下旬の発生量はやや多かった。（+）
(2) 4月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。（－）

- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での3月のアブラムシ類の誘殺数は、平年並であった。（±）
(3) 4月の気象は気温が平年並か高い予報である。（+）

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. コナジラミ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 4月の気象は気温が平年並か高い予報である。（+）

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 圃場内に黄色粘着シートを設置し発生状況を把握し、発生初期から薬剤防除を行う。
(3) 多発すると防除が困難になるので、気門封鎖剤などのミツバチへの影響が小さい薬剤を用いて低密度時から防除する。
(4) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。

5. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 4月の気象は気温が平年並か高い予報である。(+)

対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 4月の気象は気温が平年並か高い予報である。(+)

対 策 (1) 施設内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 青色粘着トラップを設置して、発生及び侵入状況を早期に確認する。
 (3) 花における発生状況をよく観察し、寄生成虫数が100花当たりで10頭になった時または成虫の寄生花率が10%になった時に防除を実施する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ー野菜、花きの共通害虫ー

1. コナガ

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや少**

- 根 拠 (1) 3月下旬の5月どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認められなかった。(±)
 (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの3月の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (3) 4月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量が平年並か少ない(+)予報である。

対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
 (2) 定植時に灌注処理や粒剤施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
 ・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

